

日航ジャンボ機墜落きょう30年

家族の悲しみ寄り添う

日本航空のジャンボ機が群馬県の山中に墜落した1985年8月12日、長崎市の御手洗千世さん(51)は、日航社員として福岡空港で勤務していた。「事故機に家族が搭乗しているのでは」と不安を抱えて空港に駆け付けた人たちの世話役を命じられた。しかし、動揺する人たちを前に21歳の御手洗さんは何もできなかった。あの日から30年。御手洗さんは今、「大切な人を亡くしたつらさを少しでも和らげたい」と、家族葬専門の小さな葬儀場を1人で経営している。

お盆の帰省ラッシュのさなかに起きた事故。羽田発大阪行きだった事故機から、大阪で福岡便に乗り換える予定の乗客もいたとい

葬儀場営む長崎市の御手洗さん 元日航社員「あの日」背負う

う。福岡空港には地元の報道陣も集まっていた。

御手洗さんは、乗客の出迎えに来たとみられる5人が過熱する取材で傷つかないように、上司の指示で空港内の貴賓室に案内した。テレビに流れる搭乗者名簿に家族の名前を見つけたのか、突然泣き崩れる人もいた。入社2年目の御手洗さんは声を掛けることもできず、ただ立ち尽くした。

御手洗さんはその後、接客能力を買われて貴賓室の主任を7年間務めるなどしたが、あの日、何もできなかった「負い目」を忘れることはなかった。「死に直面し悲しむ人たちの支えになりたい」と2010年に退職し、福岡市の葬儀社でアルバイトを始めた。

「故人とゆっくり過ごせる葬儀を」と家族葬専門の葬儀場を1人で営む元日航社員の御手洗千世さん



後、葬儀準備に追われる遺族の姿

と、高額な葬儀費用だった。「故人とゆっくり過ごせる葬儀を手掛けた」と独立を決意し、13年に長崎市で開業した。

御手洗さんは、この2年間で約50人を見送った。老いた親の遺体運びながら「こんなに軽くなっていたんだ」としみじみ語る人、しわが刻まれた故人の手をさすり「この手で育ててくれたんだね」と涙ぐむ人。遺族に寄り添ううちに「故人は死をもって『家族の存在のありがたさ』のような何かのメッセージを残そうとしている」と考えるようになった。

御手洗さんは思う。「あの日、貴賓室にいた人たちは、突然の悲劇に遭った家族からどんなメッセージを受け取っただろうか」と。そして今、故人から遺族へのメッセージの「橋渡し役」となる仕事にやりがいを感じ、自ら霊きゅう車のハンドルを握る。

(田村真菜実)